

長畝ふるさと通信

【2018年11月号】

■ 第13回 収穫感謝祭

11月24日(土)、第13回目の収穫感謝祭を開催しました。今年は夏の異常高温や台風等の影響で佐渡全体の作況指数はなんと「86」で全国最下位。当組合でもコシヒカリの平均反収は「6.2俵」しかなく、とても諸手を上げて収穫に感謝できる状況ではありませんが、「獲れ高に関わらず感謝はせねば・・・」と恒例の運びとなりました。

● 世界農業遺産で「私たちにできる事って何？」

感謝祭の冒頭、世界農業遺産「ジラス」についてみんなで考える時間を持ちました。佐渡は平成23年に国内で初めて石川県能登と一緒にジラス認定されました。

トキと暮らす郷認証制度を導入し、生物多様性農業に取り組み島全体に拡げていること。また、佐渡金山をはじめ伝統文化と農村コミュニティを保全していることなどが認定された理由です。



しかし、認定されてはや7年が経過しましたが島民の認識は低く、せっかくの認定を活かすことができていません。そもそもジラス認定は国連食糧農業機関(FAO)が世界的に重要かつ伝統的な農林水産業を営む地域に対し、認定を機会に次世代への継承を目指すことを目的としています。佐渡島民がジラス認定を意識し、経済活動や伝統文化活動などを通じて地域活性化しなければ意味がないのです。今春、佐渡市では農産物や加工品などの産物を有利販売するため、ジラスオリジナルブランドマークのデザインまで公募し何とか形にしようと試みましたが、応募者もほとんどなく生かし切れていない様です。



そこで、「私たちにできる事って何？」をテーマに佐渡市が作成したDVDを紹介しながら、長畝では何ができるのかみんなで考えようと・・・。まずは認定されたことを知ること。地域の現状をとらえて、これからの将来について考える事(農地は維持できるの？祭りは続けられるの？子供たちは地域

に残ってくれるの？)。まずはこの感謝祭を継続することもジラス活動じゃないの。

これを機会に考えてみたいと思います。自分たちのために・・・。

● 老若男女 楽しいひと時でした



90歳を超えるおじいさんやおばあさんから小学生まで約80人が参加してくれました。これまで頑張って手料理を振舞ってくれたかあちゃんグループは高齢化もあり残念ながらリタイヤしてしまいましたが、100人鍋は健在です。大鍋も13年使い込んでもビクともしない鉄鍋でこれからも収穫祭の象徴となってくれることでしょう。一番の盛り上がりはビンゴゲームで、会場中が数字に集中しお目当ての景品を狙います。「ビンゴ、ビンゴ！」と声高らかに手を挙げるさまは年齢に関係なく盛り上がりました。ポン菓子の実演は初めてでしたが、「ポーン」という爆音はお祭りには持って来いのアイテムで、これからの収穫祭に一役買ってくれそうです。(左はポン菓子機が爆発した様子)



2020年には東京オリンピック、2025年には大阪万博と莫大なお金をつぎ込んだ国家的イベントが目白押しですが、ぼくたちはひっそりとこのイベントを続けていきます。お時間のある方は是非、遊びに来てください。なんとって「参加費無料」ですから。

■ 農地は誰が守る？

政府は人口減少などによって労働力人口が減少するとして、入管難民法を改正し外国人労働者を日本に入れようとしています。その際、新たな在留資格が対象外とする「単純労働の定義」について明確な答えを避けていましたが、「特段の技術・知識・技能・経験を必要としない職種」にわが「農業」が入っていることは明らかで、怒り心頭なわけですね。バカにするにもほどがある！と思いませんか。国土を守る「農業」になぜ、もっと目を向けようとしなののでしょうか。日本人が守るべきものは一体何だ？

